人と業績

先師富貴原章信博士　追慕

稲垣淳造

『一朝随露盡　唯有夜松聲』この一偈は中国陳代の僧慧愷（大正蔵経には智愷とあるが、慧愷の誤とする説もあり、富貴原博士はこれに従われた）の辞世中の一偈であるが、唯識の境を表すものとして富貴原章信博士は好んで用いられ、生前の講義の中で幾度かこれを聴いた。いわば十八番の一つであったと言えよう。

一朝露に随って盡くれば　――唯
唯だ夜に松聲あるのみ　――識

とノートの欄外に記入してある。

故富貴原章信博士（以下「先師」と呼ばせていただくこととしたい）は、昭和十七年専門部教授嘱託として初めて教壇に立たれてから、逝去直前の昭和五十年三月迄の実に三十三年の長きにわたり（その間暫時の中断などはあったが）、大谷大学の教壇に立たれ、仏教学、とりわけ法相唯識学の講義を担当されたのであった。小生はこの内最晩年の七年間に指導を受けたのみの、しかも不肖の弟子にすぎないが、今回先師の『仏教学選集』全三巻の刊行が完結したのを機会に少しく追憶を綴ってみることとしたい。

先師は、明治四十年八月二十一日愛知県葉栗郡木曽川町定力寺に生まれられ、昭和六年大谷大学を卒業されるや、東本願寺の命により、法隆寺勧学院に国内留学され、法相唯識学の碩学として高名であった泉涌寺佐伯旭雅和上より教をうけて当代性相学の第一人者と謳われ、後に学士院会員ともなった佐伯定胤老師に師事し、親しく倶舎・唯識の教理を学ばれ、昭和十八年十一月までの長きにわたって研鑽を重ねられたのである。

昭和十七年四月大谷大学専門部教授嘱託、同十八年四月大谷専修学院教導、同十九年四月大谷大学学部教授嘱託、同二十三年五月真宗専門学校（現在の同朋大学の前身）教授を経て、昭和二十七年四月より大谷大学短期大学部教授、同三十七年四月文学部教授となり、昭和五十年五月十五日腹膜炎のため逝去（享年六十七歳　法名瑜伽院釈章信）されるまでこの職に在られたのである。

又、この間昭和二十九年九月より大谷大学学生部長、昭和四十五年十二月には図書館長をそれぞれ二年間兼務して重責を果たされた。

先師が云何にして唯識学に志し、勧学院での学問に精進されたかの動機等については、横超慧日氏が推測されているが（「富貴原章信教授と唯識学」大谷学報五十五―二）、先師はその一生を唯識教学、とりわけ南都伝統の法相教学の研究に捧げられ、

五十編余の論文を発表し、著書・編書・訳書等十数種を数える。著書として左の五編を著わされた。

日本唯識思想史
護法宗唯識考
判比量論
賢聖義略問答の研究
日本中世唯識仏教史

『日本唯識思想史』（昭和十九年五月、大雅堂刊）は、飛鳥時代の仏教の概観を述べ、これらが旧訳の仏教であることを明かした上で、中国における所謂新訳仏教の興起、法相宗の諸門流、日本伝来、南北両寺伝の形成、大成時代を経て平安中期の衰微に至るまでを、一般史の動向に留意しつつ、法相宗にのみ限定することなく唯識学の系譜を跡づけたものである。それぞれの思想的特色を鮮明にし、資料典拠を挙げながら、しかも大局的見地を失わず叙述した名著である。

『日本中世唯識仏教史』（昭和五十年二月、大東出版社刊）は、『日本唯識思想史』の続編となるもので、平安時代末期から、復興・衰頽を繰り返しつつ、戦国時代末に至るまでの諸寺の動向、師資相承の系譜を詳細に叙述している。これらの時代の唯識宗にあっては、特に教理的に目新らしい展開が見られたのではなく、むしろ自宗と他宗との教理的会通や、唯識教理の内の重要なる問題についての論議が深められていった時代でもあり、どのような問題が論じられていたかが詳細に論述されている。

今、この二著を通じて考える時、二つのことに思いを致すのである。その一は、日本唯識宗の系譜をたどることが先師畢生の課題とされていたことの一つであることである。前著は昭和十九年、先師三十六歳、法隆寺勧学院での研鑽の成果を公刊したものと言えよう。後者は昭和五十年、先師六十七歳、逝去の年である。この間一貫してこの問題を追求し、仏教関係の資料は言うに及ばず、歴史資料をも丹念に渉猟して連綿と今日に伝統する唯識宗の流伝を明すことに注がれた先師の熱意に敬意を表わさずにおれないものを感ずるのは、ひとり小生だけでは無いであろう。その二は、歴史上登場し、先師がその事蹟を明らかにする学匠たちの中、名利を離れ、道心堅固であった学匠たちへの敬虔なる思慕の念であり、唯識のさとりはこれ以外に無いという信念であった。そして先師こそまさしくそのような系譜に位置づけられるべき人であった。

小生が入学したころの成唯識論の講読には小島恵見氏の編纂された『新編成唯識論』を用いていたが、これは本文のみであり、訓や註の完備した法隆寺本『新導成唯識論』の使用についての要望がたかまり、昭和四十六年にコピーによる複製本の作成を法隆寺に願い出、許可を戴いたことがあった。この複製本に先師の跋文を草して貰ったことがあったが、「法隆寺本、成唯識論は絶版となること、久しかった。この度、法隆寺当局の好意により影印をもって出版されることとなった。令法久住、真成報仏恩の他になにもない」と実に簡潔なものであった。こ

の令法久住、真成報仏恩の語も先師の良く口にされた言葉であった。これらの精神に支えられた学匠の話に及ぶとき、先師の眼は輝き、話には熱が籠るのが常であった。唯識とは単なる学解では無く、行道であり、そしてそれはひとえに仏恩報謝としてあらわれる、先師こそまさしくそれであったと言ったとしても過言ではあるまいと思われるのである。

『護法宗唯識考』（昭和三十年九月、法蔵館刊）は、唯識宗において正義として伝承される護法論師の説を他師の説などと比較検討しつつ明確にし、以って唯識の教理を闡明しようとしたものである。そもそも『成唯識論』は、唯識三十頌に対する安慧・難陀・陳那・護法・火弁等十大論師の説を玄奘が合して訳したものであり、文章は簡潔ではあるが難解であり、この解明は『述記』や、『枢要』『了義灯』『演秘』など所謂三箇疏をはじめ、多くの論・疏を援用し、整理してはじめて可能となるのである。先師は難解で且つ繁瑣な関係を簡潔に表現せんとして、図を書き、表を用い、科を立て、箇条として対照し従横に説明している。『成唯識論』の構成に従い、順を追って説明されるところには、護法教学と、他の教学、小乗部派・真諦系唯識説・安慧等諸論師・般若空観・華厳思想等との同異が明瞭に示されるのである。しかして決して護法宗義のみを正系と断じているのでは無く、これらの同異を明すことを第一義としているのである。この意味において本書には「宗派的見解を出ない」とか、「独創的見解に乏しい」とかの批判も無いではないが、正鵠を得てはいない。これらの異同を明すことは膨大な知識の蓄積があって始めて良くなしうる業績であり、その意味で本書は学者の研究上の指針として比類なきものと言うべきであろう。

この『護法宗唯識考』は先師の博士論文として提出されたものであるが、博士論文には未公刊であるが『成唯識論述記本文考　特に初能変について』が副論文として附されている。四百字詰原稿用紙二百八十三枚の大部なものであるが、むしろ研究ノート的な性格が強く、唯識の重要な末釈は勿論のこと、豊山戒定、普寂、法隆寺故和上、山口（益氏）本成業論まで広く参照し、述記の理解に努めているのを見ることができる。義図を立て、科段を整理し、対照を明らかにする方法は『護法宗唯識考』に同じであるが、法隆寺勧学院伝統を知る思いがする。個人的な感懐を洩らされることの少なかった先師には珍らしく、若き日の勧学院時代の出来事を記したものとして「空華抄」なる文章がある（「法隆寺勧学院同窓会報」第七号　昭和十一年）が、この中で佐伯定胤老師が煩瑣な教理内容を整理するのに義図を口述筆記させる場面がある。「づうが少し大きうなるさかいな、下のほうをうんとあけて――えゝ初めに……次の段は五つに分けて、初は――次は――終は――そして初に註をいれて、割註やさかい二行にかくんやぜ……えゝかそうしてぼうを六本引くんや。上の段の一番初めと、中の段の初めから三番目と結ぶんや……」。このような成果を一目瞭然示してもらう後学の有難さと、先師の遺徳を思わずにはおられないものがあるであろう。

真宗においても幕末から明治にかけて夏安居等に随分と唯識関係の論題は講じられたのであるが、今その講録を見ると講義筆記の文章が延々と続くのみで、ここに見るような整理方法はあまり見られない。先師も真宗々派内での唯識研究の伝統の流れの中にあることは勿論であるが、これを超えた法隆寺伝統教学の先師への影響は小さくなかったことが、この一事からも知られるであろう。

尚、この「空華抄」には、佐伯定胤老師の講義が十年一日の如く倦むこと無く続けられる様が写されているが、文末には

僧正の　講釈ながし　春の鐘

の先師の句が添えられている。先師の意外に洒脱な一面が窺知されることである。

この法隆寺勧学院での研鑽生活は十二年余に及び、先師は、この間、佐伯定胤老師の指導の下、佐伯良謙・田村至道・生桑完明・西川龍山師と共に、導註など精到極まりない校訂を施された『新導成唯識論』の編纂に従事された。これらの作業も先師のその後の研究生活の基盤を培うものとなったことも言うまでも無いが、忘れることの出来ない業績と言うべきであろう。又、勧学院にあっては、勧学院同窓会誌「性相」第十号（昭和十六年）聖徳太子御忌記念論文集『日本上代文化の研究』の編纂に従事され、同誌第十一号特別号『法隆寺聖霊会』（昭和十八年）に於いては、昭和十六年四月勤修の聖霊大会の記録本文を執筆する等活躍されたのであった。『法隆寺聖霊会』本文は、今回の『仏教学選集』巻末の著作目録に脱落（目録を編纂した小生の責任による）したので特に一筆付言しておく。

更に先師には『判比量論』（昭和四十二年九月神田喜一郎氏私刊）、『賢聖義略問答の研究』（昭和四十五年二月神田喜一郎氏私刊）の二著がある。いずれも元本学教授・京都国立博物館館長故神田喜一郎博士の家蔵にかかる古鈔本であり、草書体を以って書写された断簡である。前者は新羅元暁の撰、後者は松室中算の撰佚したもので、いずれも現在は散佚して全体の伝わらぬものであるが、唯識教理史上重要な論書である。このことに思いを至された神田博士は影印刊行を企てられ、先師に懇請し、解読・解説を先師が担当して刊行されたものである。共に神田博士の私家判として刊行され市井に流布すること少なかったが、神田博士は先師の解説を「精到実にこの上もない」と評され、更に桜部建氏は「学問的自受用法楽を感ずる」（「富貴原章信博士追悼」仏教学セミナー二十一号）と評されていることからも先師の面影は髣髴とするであろう。先師はまことに学問を楽しんだ人であった。余のものへは眼を向けること無く、孜孜として学問に取り組まれた人であったと言うべきである。

先師は容貌魁偉とも表現すべき大きな体軀に丸刈りの頭、ギョロリとした眼、低く太い声、古武士とでも称すべき風貌の人で、しかもこよなく酒を愛し、酒豪であった。しかしこれから受ける印象とは裏腹に心の暖かな人であった。小生のごとき初学者の頓珍漢な質問にも丁寧な返答をいただくことが多かった。

（勿論不勉強の叱責は当然のごとく在ったのであるが……）

今でも鮮明に脳裡に浮かぶ先師は、黒板を背にして、朗々と講義される姿である。持参されるのはテキスト一冊のみでありながら、次々と示される未釈の豊富さと、その文章の多さは我々を驚かし、下根の機には理解できぬことが多かったが、先師心中に蔵されたものが自然に発露する如き姿は講讃三昧とでも言うべきものがあった。

講義もその如く、論文の執筆も早かったようである。常に数編の未発表論文を持っていられるとの噂であった。事実先師長逝後、ご遺族及びご令弟山口恵照氏より、小生等末弟に先師自筆原稿の整理を依頼されたが、この中には未発表原稿十一篇が見出されたのであった。しかもこれらは先師晩年に意を注がれた仏性についての統一的主題のもとに書かれ、そのほとんどが発表を期して推敲され、組版の指示までしてあるのであった。我々はこれらを見て、未発表の論文を公刊すること、先師の業績がまとまった形で残ること等を目標にし、これに戦前の刊行であり入手至難となって幻の名著とも言われた『日本唯識思想史』の覆刻を加えて『富貴原章信博士仏教学選集』全三巻とする計画を立て、昭和五十六年結城令聞京都女子大学元学長、横超慧日本学名誉教授、桜部建教授（当時）等先師有縁の諸先生に発起人となっていただき、選集刊行会を組織して刊行に着手したのであった。その後東京国書刊行会の快諾を得て選集刊行はこのほど無事完結したのであるが、刊行企画以降思わぬ年月を要したのは、選集刊行会事務を担当した小生の責任であった。泉下の先師及び刊行会発起人をお引き受けいただいた諸先生にお詫び申しあげ、ご寛恕を乞う次第である。

ともあれ、今回の選集完結により先師の業績のほとんどが公刊されたこととなった。これら著書を通覧する時、後学の者が蒙ることとなった先師の学恩は計り知れないものがあると言うべきであろう。ひたすら師恩に謝するの他は無い。